

日语世界童话名作选

1

日语

突破读本



世界图书出版公司

日语突破读本①

——
日语世界童话名作选



世界图书出版公司

广州·上海·西安·北京

日语突破读本①

——日语世界童话名作选

广东世界图书出版公司出版

广东肇庆新华印刷有限公司印刷

广东世界图书出版公司发行

广州市新港西路大江冲 25 号

邮政编码：510300

1999 年 1 月第 1 版 开本：880×1230 大 32

1999 年 1 月第 1 次印刷 印张：9.25

印数：0001—5000 册 字数：195 千

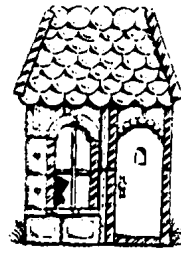
ISBN 7-5062-3712-1/H·0100

版权贸易合同登记号：19-1998-005

出版社注册号：粤 014

定价：15.00 元

本书由日本世界文化社授权广东世界图书出版公
司在中国大陆内出版、发行，版权所有，翻印必究



格林童話

目

録

◎赤^{あか}ずきん

4

◎おおかみと七ひきの子^こやぎ

12

◎ホレおばさん

20

◎いば^いら^む姫

28

◎白^{しろ}雪^{ゆき}姫^め

36



◎七^わ羽^はのからす

55

◎いさ^しましい仕^た立て^や屋^やさん

62

◎ヘンゼルとグレーテル

82

◎ブレーメンの^{おんがくたい}音楽隊

100

◎金^{きん}のがちよう

108

伊索寓言

◎北^{きた}風^{かぜ}と太^{たい}陽^{よう}

118

◎きつねとぶどう

120

◎うし^{うし}き^きな^なこ^こか^かめ

122



◎しおを運ぶろば

124

◎いたずらをする羊かい

126

◎町のねずみといなかのねずみ

128

◎きつねとからす

130

◎おひやくしよつとむすこたち

132

◎ライオンとねずみ

134

◎木こりとヘルメス

136

安徒生童話

◎マツチ賣りの少女

138

◎おやゆび姫

144

◎しつかり者のすすの兵隊

168

◎もみの木

176

◎同じさやのえんどう豆五つ

196

◎ひなぎく

204

◎空とぶトランク

212

◎みにくいあひるの子

222

◎はだかの王さま

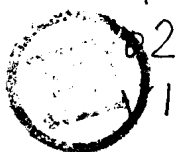
242

◎人魚姫

252



H1369.4



00012705



——
日语世界童话名作选

日语突破读本①

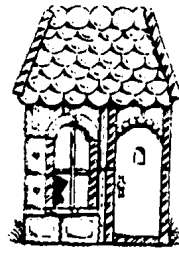


C0489001



世界图书出版公司

广州·上海·西安·北京



格林童話

目

录

◎赤^{あか}ずきん

4

◎おおかみと七ひきの子^こやぎ

12

◎ホレおばさん

20

◎いば^{いぬ}ら姫

28

◎白^{しろ}雪^{ゆき}姫

36



◎七^わ羽^はのからす

55

◎いさましい仕^{した}立て^た屋^やさん

62

◎ヘンゼルとグレーテル

82

◎ブレーメンの音^{おん}楽^{がく}隊^{たい}

100

◎金^{きん}のがちよう

108

伊索寓言

◎北^{きた}風^{かぜ}と太^{たい}陽^{よう}

118

◎きつねとぶどう

120

◎うさぎとかめ

122



◎しおを運ぶろば

124

◎いたずらをする羊かい

126

◎町のねずみといなかのねずみ

128

◎きつねとからす

130

◎おひやくしよつとむすこたち

132

◎ライオンとねずみ

134

◎木こりとヘルメス

136

安徒生童話

◎マツチ賣りの少女

138

◎おやゆび姫

144

◎しつかり者のすすの兵隊

168

◎もみの木

176

◎同じさやのえんどう豆五つ

196

◎ひなぎく

204

◎空とぶトランク

212

◎みにくいあひるの子

222

◎はだかの王さま

242

◎人魚姫

252





赤^{あか}ずきん



むかしむかし、あるところに、かわいい小^{ちひ}さな女^{むすめ}の子^こがいました。

だれでもみんな、その子^こをちらつとも見^みると、その子^こをすきになりました。でも、だれよりも一^はんか^んわい^いがつていたのは、どう考^{かん}えてみても、この子^このおばあさんでした。

このおばあさんのかわいがり方^{かた}といったら、まづに、何^{なに}をやつたらいいか、わからなくなつて、こまつてしまふほどでした。

あるとき、おばあさんはこの子^こに、赤^{あか}いビロ^びードのずきんをやりました。

そのずきんは、とてもよくにあいました。たいそう気^きに入^いつて、それからというもの、この女^{おんな}の子^こは、ほかのものをかぶろうとしなくなりました。

それで、この女^{おんな}の子^こをだれでも『赤^{あか}ずきん』というようになりました。

ある日^ひのこと。

おかあさんが赤^{あか}ずきんに言^いいました。

「赤^{あか}ずきんちゃん。ここにいらつしゃい。ここに大^{おお}きなケ^けーキが一つと、ぶどう





酒しゅが一本ぼんあるの。これを、おばあさんのところに、持もって行いって、さしあげて。

おばあさんはご病びよう氣きで、からだが弱よわっておいでなの。ケーキを食たべて、ぶどう酒しゅを飲のめば元げん氣きがでます。暑あつくならないうちに、行いってきてね。

おうちを出でたら、勝かっ手てに遊あそばないで、おりこうにして、サツサツと歩あるいてね。道みち草くさをしてはいけませんよ。そういうことをすると、転ころんで、ぶどう酒しゅのびんがわれてしまいます。そうになったら、おばあさんにさしあげるものが、なくなってしまう。



そうそう、おばあさんのおへやに入ったらわすれずに『おはようございます』つてごあいさつをするんですよ。入つてすぐ、あつちこつち、おへやの中を見回したりしてはだめですよ」

「心配しないで。だいじようぶ。わたしちゃんとできます」

赤ずきんは、そう言つて、やくそくのしるしにおかあさんとあくしゅをしました。それはそうと、おばあさんは、村から歩いて三十分ばかりかかる、森の中に住んでいます。

赤ずきんが、いよいよ森の中に入つて行つたとき、おおかみがあらわれました。赤ずきんは、おおかみが、どんなによくないことをするのか知りませんから、少しもこわがりません。

「いいお天気ですね、赤ずきんちゃん」
と、おおかみは話しかけてきました。

「こんにちは、おおかみさん」

「朝早くからどこに行くの？ 赤ずきんちゃん」

「おばあさんのおうちに行くの」

「エプロンの下を持つてるのは、ななに？」

「ケーキとぶどう酒よ。ご病気のおばあさんにさしあげるの。きのう、うちでケーキをやいたの。ケーキを食べて、ぶどう酒を飲んで、おばあさんに元気になつて



いただくのよ」

「赤ずきんちゃん。きみのおばあさんは、どこに住んでいるの？」

「ここからまだ十五分も歩いて行った森のおく。大きなカシワの木が三本立っていて、下にヘーゼルの木の生けがきがあるところよ。おおかみさんにもすぐわかるわ」と、赤ずきんは言いました。

おおかみは、はらの中で考えました。

「わかくてやわらかい子だ。あぶらがのっついてこの子のばあさんより、ずっとおいしいだろうなあ。この子とばあさんと、両方いただくには、じょうずに立ち回らないとな」

おおかみは、少しの間、赤ずきんとならんで歩いて行きました
が、こう言いました。

「赤ずきんちゃん。まあちよつと見てごらんよ。きれいな花がいっぱいさいてるじゃないか。どうしてまわりを見ないの？ 小鳥たちが、こんなにゆかいな歌を歌っているのが、聞こえないの？ きみは学校に行くときみたいに、わき目もふらず前ばかり見て歩いてるんだね。森の中はおもしろくて、楽しいのにねえ」

赤ずきんは、目をあたりに向けました。

日の光が木ぎの間からこぼれ落ちて、ゆらゆらおどっています。





それから、おばあさんの服を着て、おばあさんのずきんをかぶって、おばあさんのベッドにもぐりこむと、カーテンをひきました。

赤ずきんは花をつんでは歩き、歩いては花をつんでいました。もう持ちきれないほどになってから、やっと、おばあさんの家に行くことを思い出しました。それでおばあさんの家にむかって歩きだしました。

着いてみると入り口のドアが開いています。おかしいなと思いながら、中に入ってみると、どうもへやのようすがいつものようでなく、へんです。

「どうしたのかしら。なぜか、きょうはむなさわぎするわ。いつもなら、おばあさんのおうちに来ると、楽しくなるのに」と、思いました。赤ずきんは、

「おはようございます」と、大きな声をはりあげましたが、シーンとしています。

それで、ベッドのところに行つて、カーテンを開けてみました。

そこには、おばあさんがねていましたが、ずきんを深くかぶって顔をかくし、みようなかつこうです。

「おばあさん。どうして、おばあさんのお耳は、そんなに大きいのか？」

「おまえの話が、よく聞こえるようにさ」

「おばあさん。どうして、おばあさんのおめめは、そんなに大きいのか？」

「おまえのことが、よく見えるようにさ」

「おばあさん。どうして、おばあさんのおてては、そんなに、いやに大きいのか？」



そこらじゅうに、きれいな花がいっぱいです。それを見て、赤ずきんは考えました。「おばあさんに、つんだばかりの花の花たばをおみやげに持って行ってあげたら、きっと、よろこんでくださるわ。まだ朝も早いし、おばあさんのおうちには、おそくならないうちに行けるから、心配ないわ」

それで、赤ずきんはわき道に人って行つて花をさがしました。

一本つむと、その先にもっときれいな花がありそうな気がして、どんどん森のおく深く人って行きました。

いっばう、おおかみは、きつすぐにおばあさんの家に行つて、ドアをトントンとたたきました。

「どなた？」

「赤ずきんです。ケーキとぶどう酒を持ってきたの。開けてちょうだい」

「えんりよしないで、とつてを下におして、お人りなさい」

と、おばあさんは、返事をしました。

「——おばあさんは、からだが弱つていて起きられないのよ」

おおかみは、ドアのつてに手をかけて下におしました。

ドアがバーンと開きました。

おおかみは、もう口をきかずに、まっすぐ、おばあさんのベッドに近よつていて、おばあさんをペロツと丸のみに飲みこんでしまいました。



「おまえを、すっかりつかまえて、だけるようにさ」

「おばあさん。どうして、おばあさんのお口は、そんなにおそろしく大きいの？」

「おまえを、ちゃんとうまく食べられるようにさ」

と、言い終わらないうちに、おおかみはベッドからジャンプしておそいばかり、かわいそうな赤ずきんを、ペロツと丸のみに飲みこんでしまいました。

おおかみは、おなかがいっぱいになったので、もう一度ベッドに横になつてねむりこみ、大いびきをかきました。

そのときちょうど、家のそばをりょうしが通りかかりました。

「ここのおばあさん、すごいいびきをかくんだなあ。どこか、ぐあいが悪いんじゃないか。みてやらなくちゃ」

と思つて、へやの中に入り、ベッドのそばに行きました。

ベッドには、おおかみがねていました。

「このやろう、とうとう見つけたぞ。長いことさがしていたおおかみが、こんなところにいたとはな」

りょうしは、りょうじゅうのじゅう口をおおかみの頭にあてて、引き金をひこうとして、考え直しました。

「こいつ、ここのおばあさんを食べたんじゃないのかな。まだ助けられるかもしれない」と思いついて、りょうじゅうでうつのはやめ、はさみを取りだしました。

ぐつすりねているおおかみのおなかをジョキンジョキンと、二、三べん切ると、ハツとするようなまっかなずきんが、見えてきました。それから、また二、三べん切ると、女の子がとびだしてきて、

「ああ、おそろしかった。おおかみのおなかの中は、まっ暗なのよ」と、さげびました。次に、おばあさんも出てきました。おばあさんは、息もできないほど弱っていました。

赤ずきんは、すばしこく動いて、大きな石ころをいくつも拾ってきて、おおかみのおなかにつめこみました。

おおかみは、目をさまして急ににげだそうとしたとき、石が重いのでヘタヘタとなつてたおれ、死んでしまいました。

これで、三人とも安心しました。

りようしはおおかみの毛皮をはぎ、それを家に持って帰りました。

おばあさんは、赤ずきんが持ってきたケーキを食べて、ぶどう酒を飲んで、元氣になりました。

赤ずきんはこう思いました。

「おかあさんがいけないとおっしゃったのに、一人で道草をして、森のわき道に入るようなことは、二度としないようにします」



おおかみと七ひきの子やぎ

